

# 仏女新聞

仏女新聞社 飯島可琳

秋分も過ぎて、ようやく秋らしくなってきました。近年は「ものすごく暑い日」または「ものすごく寒い日」しかないような極端な夏や冬が続いています。過ごしやすく快適な秋を存分に楽しみましょう！

## 国宝特別公開 2016 興福寺

### 五重塔初層の空間

五重塔と東金堂は興福寺の中でもよく知られた建築物である。二つの建築物が寄り添うように建っている様子を見ると、聖武天皇が東金堂を造立し、光明皇后が五重塔を造立したことが納得できる。近接して建てられているので、ほぼ同時期に幾たびか罹災と再建を経験している。現在の建築は六百年ほど前に落雷で焼失した後に再建されたものである。



東金堂には常にお参りできるが、五重塔

の内部が公開されることは滅多にない。今は貴重な機会である。八月二十六日から十月十日まで五重塔・三重塔の初層が公開されている。

西側の扉から五重塔に入った真正面、西に向かつて阿彌陀如来が座す。五重塔の心柱を覆う四角柱の一边を背にしている。北には弥勒如来、東には薬師如来、南には釈迦如来が向いている。十一面観音頭上の一面が「どの方向を向いているのか」気になって調べたことがある。四方八方にらみをかかしているように思えるが、化仏や仏面には特に「方向の概念がない」のだそう。それでもやはり私には、興福寺五重塔初層の四仏が隙なく東西南北を向いて、大切なものを外部から守っているように見える。

五重塔初層の天井は安置されている仏像の頭部からおよそ二メートル程度上にある。お堂に比べて面積が狭いからだろうか、頭部から天井までの空間が広く見える。帷（とぼり）に四方を囲まれたその天井の高さに惹かれた。帷の中にある四仏の法力はおそらく心柱を伝って水煙にまで達し、空に放たれるだろう。それはまるで、かつて五重塔を焼失させた稲妻を天に返すかのようである。

猿沢池のほとりに立つと、東金堂は木立に紛れているが、背の高い五重塔はよく見える。五重塔の西方に中金堂が再建中である。平成三十年には猿沢池から中金堂が見えるようになるだろう。

### 三重塔弁才天の雰囲気

南円堂の西南下方にある三重塔は低い位置にあるので正直のところあまり目立たない。興福寺三重塔と聞いても「三重塔？五重塔の間違いじゃない？」と思う人も少なくないらしい。そんな三重塔に祀られているのが「弁才天坐像」だ。明治十五年に旧興福寺子院（世尊院）から客仏として移された仏像である。こぢんまりとした像の雰囲気は南円堂下にひっそりと佇む三重塔に似ている。弁才天のふっくらした頬や頭上の赤いちいさな鳥居が愛らしい。足元で仕える十五童子とともに、子どものようなあどけなさを感じさせる。ただし、これはあくまで一見したところの印象である。



弁才天は七福神の一人として名の知れた神であるが、興福寺三重塔の弁才天は「宇賀弁才天」ともいわれる仏である。八臂の姿で、すべての手に法具を携えている。さらに頭上の鳥居の奥に宇賀神が鎮座しているのが印象的だ。幾たびか参拝すればその

外見が当たり前のように思えてしまうのだが、頭の上に鳥居が乗っているという時点で充分不思議な姿だといえる。それに加えて頭上では、蛇のあたまに翁の頭がついたような外見の神がとぐろをまいていて。ただでさえ小柄な弁才天の小さな頭上の空間で神秘的な造形が山盛りになっている。この混沌とした素朴な配置が「子どもらしさ」や「愛らしさ」を感じさせる所以なのかも知れない。

宇賀弁才天という呼称は、弁才天の頭にこの宇賀神が乗っていることから付いた名だ。宇賀神は例えば信貴山の空鉢護法堂や喜光寺などにも、とぐろを巻いた姿で安置されている。「笑う」というより、「微笑む」という程度に少しか持ち上がった口角が、かえって近寄りたいたい雰囲気を醸し出している。そして、手に携えた法具と頭に乗る宇賀神は、子どもらしい姿の弁才天に、すごみのような雰囲気を与えている気がする。

三重塔初層内部の創建当時の彩色をバーチャル参拝できる「VR体験」（コンテンツ制作は凸版印刷）も開催されている。ゴーグルを着けてすぐに、三重塔入口まで浮遊する感触を楽しめる。現在の三重塔内部の映像に重ねて創建時の色彩がよみがえり、頭を動かして上下左右をゆっくりと眺めて欲しい。（写真は興福寺教学部よりお借りしました。）

【興福寺の国宝特別公開は十月十日まで。VR体験の後期は十月一日（土）～十月十日（月）祝）九時から十六時まで、各日先着二五〇人。】